

DX・生成AIで病院経営に新たな価値を 生成AIは現場での活用が前提になる

社会医療法人財団慈泉会相澤病院(長野県松本市、相澤孝夫最高経営責任者)は、人口43万人の松本保健医療圏(3市5村)に位置する。456床。2021年にDX推進室を設置。課題を起点にDXと生成AIを活用した働き方改革と生産性の向上に取り組み、新たな価値の創造を進めている。

DXは病院の変化に 必要不可欠

社会医療法人財団慈泉会相澤病院は、2021年にDX推進室を設置。「各事業体で抱える課題を基点としたITの活用により、働き方の変革を推進し、生産性の向上を実現する」「患者、利用者と病院を繋ぐ次世代型のICT医療を指向し新たな価値を創造する」を部署ビジョンに掲げる。

昨今、地域の医療提供体制は大きな転換期を迎えている。少子高齢化による医療需要の増加、医師・看護師など医療の担い手不足、医療材料・光熱費等の高騰など、地域の医療提供体制の持続可能性は



西村直樹DX推進室室長

かなり危惧されている。経営戦略部の西村直樹DX推進室室長は「地域に必要な医療・介護体制を維持するため、未来を見据え、常に変化し続ける病院であることが重要です。また、従来業務を抜本的に見直し、仕組みを最適化して課題に対応する取り組みも欠かせません。その実現のため、DXは必要不可欠な手段です」と語る。

相澤病院のDXの進め方は、①課題の把握②優先順位の策定③導入するデジタルツールの選択④環境構築と運用策定⑤運用開始と運用の見直し―となる。あくまで課題を起点にデジタルツールを活用し、働き方改革の促進と労働生産性の向上を目指している。その上で西村室長は、「現状行っているアナログ的な業務を変革・改善し、その上で必要なデジタルツールを用意することが大事」と語る。既存業務の見直しが不十分だと、システムを導入しても費用負担が増え、業務負担は変わらないといった結果に陥りやすいからだ。併せて、既存業務を見直し、標準化を

進め、無駄な作業や工程を排除する「引き算の改善」もDX推進室として重要視している。

DXの進め方については、トップの決断によるトップダウンと現場主体のボトムアップの両方があるが、ボトムアップの方法としては、3カ月に1度、部署長が作成する運営報告からDX推進室に関わる課題を抽出し、対策を講じる―を行っている。

約850台のiPhoneを導入し不感知対策を実施

相澤病院が導入したソリューション等は多数あるが、代表的なものとして、従来のPHSに代わるスマートフォンの導入が挙げられる。法人全体で約850台のiPhoneを導入し、通話機能、電子カルテとの連携、チャット機能、業務効率化アプリの活用など、さまざまな機能を活用している。

しかし、スマートフォンの導入に際しては、病院の電波改善が最